

「私はソーシャルワーカー」

社会福祉法人後志報恩会

小樽後志地域障害者就業・生活支援センターひろば

所長 金子宣

裕

みなさん、はじめまして！

私は、北海道小樽市で、社会福祉法人後志（しりべし）報恩会、小樽後志地域障害者就業・生活支援センターひろばの所長と主任就業支援担当者を担当し4年目を迎えました金子と申します。

知的障害者施設で17年程、作業支援や生活支援、地域生活や就労促進の支援経験があります。

今回「私はソーシャルワーカー」という題名でこの原稿を書いておりますが、今までソーシャルワーカーという言葉を使って、どれくらい自分の職業をイメージしてきたのかを振り返ってみると、職業欄にソーシャルワーカーと何気なく記載していたものであると気がつき、今回、あらためて、「ソーシャルワーカー」とはどのような事を指すのかを自分の職業を通して見つめ直す切っ掛けとなりました。また、社会的にどれくらい浸透した言葉となっているのかが気になってきました。

ソーシャルワーカーって専門家？

ソーシャルワーカーなんて言われると、言葉の示す意味では「社会福祉事業に従事する人」や「社会的弱者に対する公私の保護及び援助」という社会福祉的な、堅い福祉の専門家のイメージを抱いてしまいます。しかし、私が経験上、感じるソーシャルワーカー像は、「社会的或いは社会的な働きをする人」と理解した方が良いでしょうと感じます。

実際の支援場面では専門家っぽくなってしまいがちである私も、クライアントの生活のしづらさに寄り添った生活感あふれる感性を失っては、専門知識や技術は役に立たないものだ痛いほど実感させられています。

日頃、職業上の相談支援を行っている業務を通して、クライアントから学ぶことには「品質に拘ったしあわせ」であり、それが暮らしの視点なんだと気づかされます。

英語で言うと QOL(Quality of Life)とも言い換えることができ、障がいがあっても無くても万人が共通している、生きていくための「夢」の実現目標なのではないかというように感じてなりません。

そこに携わる私がどんなに立派な専門家っぽい振る舞いを行っても、クライアントには響かないこと。私はいつでも、この感性に立ち返れるようにしておかなければと意識し、人が生きていくための「夢」の実現目標に寄り添わせて頂いていることに感謝しなければいけないと感じます。

地域社会や市民レベルではどう見てる？

ところで支援活動をしていると「福祉の方は大変ですね」と言われることがあります。若い頃は上手くかわしてきたなぁと振り返れますが、経験を重ねてくると、「福祉と言っても、幅広くて全ての人の身近なものなんですよ」と意味ありげで曖昧な説明するようになってきた自分の変化に気がつきました。

実際に「福祉」という言葉が持つ意味としては障害児者、高齢者に関連した事柄を指す言葉として使われる事が一般市民でのイメージではないでしょうか？私の中でしっくりいかない部分です。

世界中、何処でも誰でも「ゆたか」な「しあわせ」を目標に社会参加し始めると思うので全ての人の生活に密着した言葉として使ってもらえるようであればいけないよなぁ！と考えさせられます。ソーシャルワーカー(自分)はもっと頑張らねばとも感じます。

ソーシャルワーカーはクライアントの「生活のしづらさに寄り添って、品質に拘ったしあわせ」をクライアントと共に求め、地域社会との接合点を見つけていく中で、実際の生活者の視点として周辺社会環境に目を配り、必要に応じた地域社会へのアクションを起こしていく事も重要な職務なのだと感じます。そのために地域社会の仕組みと連携していく事は有効な手法であると思います。

就労の側面から見る地域社会

私のソーシャルワークの接点は職業上の支援を通して「暮らしにくさ」を持つクライアントの方々と共に課題に向き合って進めていく事であり、社会全体から見ると、極めて狭い1つの切り口から始まっているが社会全体へと広がり期待していく夢のある職業であるとも、あらためて感じているところです。

最近私が就業支援の現場で日々感じる事なのですが、どこへ行ってもネットワークの構築、連携という事がキーワードとなっているのですが福祉業界だけの話ではないようです。

また、実際に様々なネットワークが地域には存在しているようであり、私は自分の目的に直接関係性があると推測ができるネットワークへの参加は案外、面白

くない！（否定はしません）どうせなら、全く異なった人のつながりでネットワークを構築していく方にエネルギーを注いでいく事が、未熟な私に多くの刺激を与えてくれそうな気がしています。

人の持つ感性やエネルギーを共有して展開するネットワークには、自分が帰属する団体や組織が求めている目的とどのように重なっているのか？或いは不足していたのか？を気づかせてくれる期待感を感じさせてくれます。

おわりにかえて

偶然出会ったある企業主から教えられた、忘れられない言葉があるのでご紹介したいと思います。

「企業は事業所と言うべ！事業をするとこなんだわぁ！事業っていうのはなぁ、町の人役に立つことをなんだわぁ！町の人が暮らしに役立つことをするのに町の人（従業員）の協力してもらってやるんだ、そして町の人（従業員）の生活を豊かにできれば町に還元できる効果も大きくなるんだ！だから事業を営むのに儲ける必要はない！大事なのは損しないように長く続けるから価値があるものなんだ」と、あたり前のように私に話された。恐らく私の言動や振る舞いに専門家気取りだが、本当のことを「わかってねえなぁ」と印象づけたようで、そのようにおっしゃって頂いたのだろうと私なりに振り返っております。私は以前にも似たようなお話しは聞いた事がありましたが、この事業主から聞いた自分は、深いことを理解していなかったんだと実感させられました。「知らない」という自分を「知らされた」瞬間でありました。このような人とのつながりを大切にしたいネットワークには、たくさんの「知らない自分」を教えてくれ、「知る」チャンスを生み出していく貴重な機会にもなるんだという体験をしました。私はその場面に遭遇している自分は人に支えられてソーシャルワーカーと名乗らせて頂いていることに気づく一幕でもあったのです。

まだまだ私は「ソーシャルワーカー？」ですが人に支えられながらも良い出会いをできるだけ多く繰り返して多くの方々と共に歩んでいきたいと思っております。